

パタゴニアに行くことにした。

まずは南アメリカ大陸最南端の街、プンタ・アレーナスである。

一般にパタゴニアとは、南緯40度よりも南の地方を指すらしい。面積は日本の2.5倍。

モスクワで知り合ったスペイン人が、世界中であれほど素晴らしい景色のところはない、と断言していたので興味を持っていた。

プンタ・アレーナスに至っては、南緯50度を越え、首都のサンチャゴよりも南極の方が近いのである。



サンチャゴ旅行代理店で買ったランチリ航空のチケット

は往復で200ドル弱。途中で一回経由するが、片道4時間20分のフライトを考えると比較的安いと言える。日本の場合、羽田から石垣が3時間。正規料金の場合、たしか往復で11万円だから、サンチャゴからプンタ・アレーナスまで2400キロという距離を考えるとこの料金ならやはり行くしかない。

南の果てゆえにとっても寒いらしい。3月のプンタ・アレーナスの気温は10度を下回る。そして、この地方は猛烈に風が強いらしい。何と言ってもマゼラン海峡のあるところなのだ。

イースター島に行く予定だった私は、すっかり夏の格好だったので、ブエノスアイレスで防寒具を買ってパタゴニアに臨んだのだった。

プンタ・アレーナスへ

飛行機に乗る。途中で一回、中堅の都市プエルト・モンを経由する飛行機なのだった。そこで30~45分も消費する。その代わり2回食事が出る。

ランチリは、国際線のブエノスアイレスに行く時は酒が出なくて、国内線は酒が出るのだった。不思議な航空会社だ。まあビールもワインも、水の価格とあまり変わらないが。

上空から湖や氷河が見えた。

氷河が崩壊して湖が一部ふさがれている。ガイドブックによれば、そうした大崩壊によってクルーズが中止に追い込まれるケースもあるそうだからその規模はすごい。

上空から見ると湖は無数にあるようだ。

しかし奇妙なことに気がついた。湖の色が2通りあるのだ。くすんだエメラルドグリーンに、対して冴えた青。光の角度で変わるとかではなくて、明らかに違うのだった。とても不思議な光景だ。



パタゴニアは天気が悪い場所で、こうして飛行機から氷河が見られるのはそれほど多くないらしい。ラッキー！

メタノールプラント

プンタアレナスに到着寸前に何かの工場が見えた。良く見るとメタノール工場である。チリは銅を始め、天然資源の豊かな国で、南部では石油や天然ガスが産出する。

チリのメタノールは有名で、確か世界で二番目に大きい工場のはず。

実は私、ただの飲んだくれではない。エタノールのみならず、メタノールにも強いのだ。

現在日本ではもはやメタノールを作っていない。でも需要は高い。はるばる地球の裏側からメタノールを運んでこなくても、アジアで作ればいいじゃないかというのが日商岩井のアイデアで、私は7年前、その担当の末席にいたのだった。実は私の放浪は、その商社時代に担当していたインドネシアのメタノールプラントがスタートポイントだったのである。

たまたま、さらに他の大きなプロジェクトがスタートし、当時はその工場を結局見れずじまいだったのが、会社を辞めてから実現したのだった。記憶にある図面通りに工場が出来上がっていて、しかも順調に操業されていて感動したものだ。

そのメタノールプラントを半年前に見てきたのだが、このチリのメタノールプラントも、その作りがほとんど同じなのが面白い。

ペンギン営巣地

ペンギン営巣地はプンタ・アレナスから70キロほど北にある。その場所へ行くツアーに参加した。値段は5000ペソ(1000円)である。

快適なコンクリートの道路が途中から砂利道になり、モンゴルの大地と同じような草原が広がっているところを通る。
車が急に速度を緩めた。

正面に、羊の群れだ。300頭ぐらいが道をすっかりふさいでいる。そんなところまでモンゴルにそっくりだ。

ただ、羊は痩せていて、なんだかきたない。あまり元気もなさそうだ。

ここでは“天高く馬肥ゆる秋”の法則が通じな



インドネシアのプラントよりも規模が大きい。多分年産150万トンくらいなのではなからうか。こんな田舎にあったのかと感動。



羊の背中には赤く所有者のマーキングがしてあった。羊飼いの犬はとても小さく羊でも踏み潰せそうなのだが、羊って従順だあ。

いのかもしれない。そもそも緯度が高すぎて、天は常に低いだろうし。

ペンギン営巣地によっては、ペンギンの群れに人間が入らせてもらうということが出来るらしいが、プンタ・アレナスのペンギン営巣地では、8ヘクタールの敷地にある、1.5キロほどの決められたコースを1時間ほど掛けて歩くことになっている。コースには縄が張っており、ペンギンに最接近しても数メートルであるところが今一つだ。

ペンギンツアーが夕方4時からというのは、ペンギンの活動が終わって巣に戻っている頃、ということらしいが、この日はペンギンの数も少なかった。200つがいくらいではなからうか。世界には数多くの種類のペンギンがいるそうで、このチリにも10種類前後いる。このペンギン営巣地にいるのは、【マゼランペンギン】という種類らしい。このマゼランペンギンは、この地域だけに、6万つがいほど生息していると聞く。

特徴は以下の通り。

- ・1日のハンティング時間：8.5時間
- ・ダイビングの深さ：15m(最大で78m)
- ・ダイビングのスピード：2メートル
- ・ダイビングの長さ：58秒(最大で160秒)
- ・体長：70センチ程度
- ・体重：オス4.7キロ、メス3.7キロ
- ・寿命：20年



強い風に耐えているかのようにじっとしているペンギン達。歩いている姿などほとんどみない。

ペンギンは、当然ながら海岸にもたくさんいたが、一方で巣作りは大地に穴を掘る必要がある為、陸上、しかも草原という感じのところにもたくさんいる。当たり前なのかもしれないが、とても新鮮だった。テレビで映る映像では大体海岸にいるし、水族館ではプール脇にいる。

草原にいるペンギン、ピクニックに来ているようで、なかなか絵になる。

プエルト・ナタレスへ

プンタ・アレナスから、今度はバスに乗りプエルト・ナタレスと言う街を目指す。その行程は片道3時間。

プエルト・ナタレスは今回のメインである、パイン国立公園の入り口の街なのだ。

プエルト・ナタレスにはホテルがたくさんあるようだったが、時間の節約の為に、バスターミナルから直ぐのところを選んだ。ガイドブックのロンプラによると、ここには名物おばちゃんがいるらしい。

あいにくツインの部屋しか空いておらず、15,000ペソ(3,000円)も取られてしまった。

台帳に名前やパスポート番号、国籍などを書き込む。

Japanと言う文字を見るや否や、おばちゃんが驚いて喜んでいる。どうやら日本人は初めてらし

い。

多分、その反応を見る限り、どうもチーノ(中国人)と思っていたようだ。私はこの南米で中国人に出遭ったためしがないが、どうも南米というところは、東洋人を見ると、チーノと思い込むらしい(そして大抵は馬鹿にするか見下す態度を取る)。

おばちゃんは態度を一変し、急に愛想がよくなり、おせっかいを焼き始めるのだった。

私が明日パイネ国立公園に行くと知るや、どこぞへ電話し、勝手にバスの手配をしようとして、いささか閉口した。

そもそも値段交渉の時に、先にハポネスと言っておけば良かった…。

宿を決めた後は、パタゴニアの目玉、パイネ国立公園へのツアーを企画する旅行代理店探した。宿の近くの旅行代理店に行くと、3人の日本人がいた。

その内の一人が、

「あの～、昨年9月頃にモンゴルにいませんでした?」と聞く。

何と、ウランバートルで会った慶応の学生なのだった。

当時は夏休みでモンゴルへ、そして今は卒業旅行でパタゴニアに来ているという。半年ぶりに地球の反対側で再開だ。

こんな偶然も面白い。

再開を祝して一緒にご飯を食べることに。どうも最近偶然についている。

パイネ国立公園

パイネ国立公園のツアーの客は7人。スペイン人カップル、ドイツ人女性二人、イスラエル人カップルに私。

このツアー、英語 OK という話だったが、ガイド兼運転手の男はあまり英語が話せなかった。その代わりにとてもよく働く。

まず頻繁に車の窓を拭いている。パタゴニアは噂に違わず寒いので、窓を開けばなしで車を走らせることは出来ない。しかしプエルト・ナタレスから少し進むともう砂利道なので、窓が汚れてくる。休憩の度に彼は窓を拭いているのだった。プロ魂を見た気がした。

ツアーの車は、パイネ国立公園に行く前に、まずミロドンの洞窟へ行く。

この洞窟は、かつて海水面が高かった頃、波によって柔らかい地盤だけが削られ、その後海水面が低下し、その姿を現わしたものらしい。

確かに巨大であるが、何のヘンテツもない洞窟の様に思える。これなら山口の秋芳洞の方が凄



パイネ国立公園へのツアーのほとんどがここへ立ち寄りみたいだ。でもあまりたいしたことはない。

い。こんな洞窟に入場料 3000 ペソ(600 円)は高いぜ。

そう思っていると、一体の巨大なナマケモノの様な動物の復元像が洞窟の中に立っている。これがミロドンと呼ばれる動物らしい。体調は 3 メートルもある。絶滅は一万年前ということだから、恐竜ではなさそうだ。

パイネ国立公園までは車で片道約 3 時間である。その途中は上記のミロドンの洞窟くらいしかないの他の連中は寝ていたが、私には比較的楽しい行程だった。

途中まで、実にモンゴル平原にとてもよく似ているのだ。

黄金色の大地、青い空、草の形、羊の群れ....。北方の大地と、南の果てが似ているなんて面白い。

片方はほとんど雨が降らず、片方は年中雨が降っている様な土地なのに。



これがパタゴニアの典型的な大地らしいのだが、モンゴルにそっくりなのだ。

ここでは、羊の他に、ダチョウもいる。飼われているのかどうか分からない。柵を越えて自由に行き来しているので、もしかすると野生なのかもしれない。

俗に言うアメリカダチョウらしい。背はそれほど高くなく 1 メートルくらい。走るスピードも人間と同じくらいではなかろうか。

グアナコという野生動物の群れに遭遇する。このグアナコは、ラマの仲間らしい。鹿とロバを掛け合わせたような動物だ。

これもモンゴルで似たような動物を見た。モンゴルのは 1 メートルくらいで、こちらは 2 メートルくらいある。

人懐っこい訳ではないが、特に警戒する訳でもない。5 メートルくらいまでなら近づくことが出来る。



ロバの仲間のくせに走ると早い。あまり人を警戒しない様で、結構近づくことが出来る。

走るとなかなか速い。ロバの仲間とはとても思えない敏捷さである。これならパタゴニアに住むといわれるプーマに襲われても逃げることが出来るのかも。

モンゴルでは食用にされていたが、ここでは食べる事はないという話だ。

次に見たのは滝である。
サルト・グランデと言うらしい。

この日は天気が良かったが風がものすごく強かった。これがパタゴニアの特徴らしい。雨か、強風の吹く晴というやつだ。遠くでも滝の水飛沫が飛んでくる。

イグアスほどの落差はないが、湖から湖に流れる滝だけに、水量はものすごいものがある。さらに数日前まで降っていた雨のおかげでさらに迫力が増している。



みどり色の水が一気に流れる様は圧巻。水飛沫がすごく、虹が二重にも三重にも見える時がある。

滝壺のみならず、数十メートル先まで泡で真っ白い。見ていると吸い込まれるようだ。

トーレス・デル・パイネ

パイネ国立公園の目玉は何と言ってもパイネ山である。

「トーレ」とは「タワー」の事で「塔」である。パイネ山は3本の岩峰で出来ている。その高さはそれぞれ2700、2800、2850メートルで、いかにも花崗岩という尖がった形をしている。

世界中のトレkkerが、このパイネを目指してくるのだった。プエルト・ナタレスの街で行き交う旅行者は、皆が皆、巨大なリュックを背負っている。幾つかのキャンプ地を経て、ようやくパイネに迫れる、そう聞いていた。

因みに、私のリュックだって70リットルで負けていない。おまけにその中にはシュノーケルもウエットスーツも入っている。万全だ。

ところが...、運転手兼ガイドが、
「ほれ、パイネが見えたよ」と運転しながら指を差す。
あれ？ 登らなくても見えちゃうの...？

パイネは高い山ながら奥深く、トレッキングをしないと見えないものだとてっきり思っていた。苦勞して苦勞して、どどーん見える、そんなイメージだった。

それがあっさり見えたので戸惑う私。

そして実はスグー高い山をイメージしていたのだが、何だか他の山とあまり変わらない。形も特徴があるのだが、槍ヶ岳みたいなもんだ。

夢にまでみたパイネが...(実は見ていないけど)。
長年の夢だったのに...(イースター島を諦めてからだが)。
なんだかあまりに感動がなく、呆気に取られた。

この日帰りツアーは 1 日コースで、プエルト・ナタレスに戻ることにしている。
パインのトレッキングをするには、再びバスで来なければならないので、私はこのツアーを途中で放棄し、レフヒョと呼ばれる山小屋に泊まる手はずをしていたのだった。その予約さえしていなければ、もうパインを見たのでさっさとプエルト・ナタレスに戻るところなのだが...

ツアー一行と別れ、山小屋行きのミニバスを待つ。

ところが...

20~30 分ごとにあると聞いていたが、次のバスは何と 2 時間後だという。騙された。
山小屋近くのキャンプ場へ行くスペイン人カップルと一緒にヒッチハイクをすることに。
このスペイン人カップルは、何と 3 ヶ月、このパタゴニアを旅するのだそうだ。やることが凄い。
ヨーロッパの若者にはこんな人たちが結構多いのは本当に驚かされる。
最低でも大体 3 週間という感じ。休暇ということでは、日本は本当に発展途上国だ。

歩いたら 2 時間弱かかる道を、パジェロに拾ってもらい山小屋へ。

ところが...

予約されているはずの山小屋では、お前の名前は無い、そして満室よ、と言う。騙された。
もう、プエルト・ナタレスに戻るバスはない。

仕方なく、いきなりキャンプをすることに。一人用のテントを借りる。寝袋を持って来て良かった。人生、何があるか分からんものだ。

シュノーケルもどこかで役に立つだろう。

食事は、この山小屋のレストランで取れることになっている。ただ数に限りがあるらしく、滑り込みセーフという感じだった。

厨房のチリ人達は、山で働いているだけにとっても陽気で気さくな人たちだ。そして食事も割と本格的で、山小屋とは思えないくらい。

値段は大分高めだが(因みに 8000 ペソ(1600 円))。



忙しい中、手を止めてポーズを取ってくれた。作っているのはパスタ。チリでは生パスタを使うことが多いみたいだ。

翌日、せっかくだからいざトレッキングへ、と思ったが、ものすごい豪雨だった。

キャンプ場の近くには、川幅 50 センチの川が流れていたが、何時の間にか 5 メートルになっていて、小さい橋が決壊しているほど。

最高峰を無酸素・単独登頂をするほどの登山家の私であるが、さすがに豪雨の中、トレッキングをしても面白くない。もう泣く泣く断念することに。

因みに、ここで言う「最高峰」とは九州最高峰(1935メートル)の事で、「単独」とは、みんなから後れがちだった、と証言する友人達が、「もう言い訳十分でトレッキングを諦められたね」と言いそうであるが、それは誤解である可能性が高い。ああ、トレッキングしたかった。

しかし、このパイネ国立公園だが、感動する人が多い割には私には今一つだった。草原や動物はモンゴルで見たし、洞窟は秋芳洞、滝はイグアス、山は槍ヶ岳と言った具合で、パタゴニアってこれだけ? などとってしまうのであった。これで温泉でもあれば別なんだが…。せっかく日本から40時間かかるこの地に来ているのに、という思いが強い。

必ずつづく